

## 2. 妻木晩田遺跡に見られる石製管玉の素材獲得技術（予察）

### 1. はじめに

玉作については、これまでに多くの研究者によって研究が為されており、大きな成果が上げられている（寺村 1966、米田 2000、大賀 2001 他）。また、鳥根県古代文化センターがおこなった中国地方の玉作遺跡および玉製品出土遺跡の集成により、山陰地域における管玉製作の様相が明らかになりつつある（深田編 2004、2005）。

一方、管玉の製作技法については、大賀克彦によって大きく 4 つの技法に分類されている（大賀 2001）が、素材獲得技術を詳細に検討した研究は限られている。一例として、丹羽野裕がおこなった西川津遺跡の管玉製作技術の再検討（丹羽野 2004）があげられるが、分割に使用する工具や、施溝分割技法以外の素材獲得技術の解明など、未だに課題は残されている。

さて、妻木晩田遺跡では松尾頭地区第 31 竪穴住居跡の管玉未成品をはじめとして、玉作の痕跡が検出されている。本稿では、これらのうち管玉製作資料に焦点を当て、特に素材獲得技術を詳細に検討することにより、妻木晩田遺跡における管玉製作の特徴について迫りたい。

なお、管玉製作の研究史は膨大であるため、紙面の都合上本稿では割愛させていただく。

### 2. 妻木晩田遺跡出土の石製管玉関連資料

妻木晩田遺跡では、これまでに 30 点余の石製管玉関連資料が出土している（第 1 表）。このうち、使用される石材は概ね 3 種が確認されており、それぞれの石材ごとに素材獲得技術の特徴がある。ここでは、石材ごとに素材獲得技術の詳細を見ていく。

なお、素材獲得技術の識別については、打点、打面、バルブ（打瘤）等を詳細に観察し、素材の打割に直接打撃、間接打撃、押圧剥離のいずれが用いられているかを判断した。一般的に、バルブが発達する剥片は「硬質ハンマーによる直接打撃」、バルブがあまり発達しない剥片は「軟質ハンマーによる直接打撃」、バルブがほとんど見られず打点が明瞭であるものは「間接打撃」、打面が面を為さずに丸みを帯び、バルブがあまり発達しない剥片は押圧剥離によるものとされる。筆者の石器製作の経験に基づき、このような視点から素材獲得技術を判断した<sup>(1)</sup>。

また、石材については産地同定や石材鑑定が不十分で

あるため、肉眼観察によって石材 A、B、C に分類した。

#### (1) 石材 A にみられる素材獲得技術

石材 A は、女代南 B 群の碧玉に類似した<sup>(2)</sup>、淡緑色でやや硬質の石材である（第 1 図 - 6・7）。妻木晩田遺跡からは 2 点が出土している。

6 は、洞ノ原地区西側丘陵から出土した、施溝分割技法によって成形された「直方体素材<sup>(3)</sup>」である。切り合い関係から、A 面に施溝して F 面を分割し、D 面に施溝して C 面を分割した後、さらに A 面に施溝して B 面を分割したと考えられる。

7 は、松尾頭 4 区から出土した、施溝分割技法によって成形された「直方体素材」である。D 面に施溝して A 面を分割した後、さらに A 面に施溝して B 面を分割している。さらに、B 面に施溝して C 面を分割しており、施溝面を転移させながら直方体に成形している様子が窺える。また、施溝分割された面はいずれも研磨を施されており、分割面を平らに整形しようとする意図が感じられる。ただし、小口面は施溝分割によって形成されておらず、打割によっている点は 6 と異なっている。

石材 A の資料は、いずれも施溝面を転移させる施溝分割技法によって直方体に成形されており、共通する点が多い。7 は C 面に施溝痕が見られ、「直方体素材」をさらに分割する意図が認められるが、途中で放棄されたと考えられる。

石材 A は 2 点のみの出土であるため、目的とする「角柱状素材<sup>(4)</sup>」の法量など詳しいことは不明であるが、いずれも単発的に出土している。

#### (2) 石材 B にみられる素材獲得技術

石材 B は、緑色凝灰岩に類似した、石材 A より白っぽい淡緑色で軟質の石材である（第 1 図 1・2・8～11）。妻木晩田遺跡からは 7 点が出土している。

1～2 は管玉の欠損品である。

8～11 は、管玉製作に関連する剥片と考えられる。8、10 は、バルブ（打瘤）があまり発達していないことから、ソフトハンマーによる直接打撃による打割であると判断できる。一方、9 はバルブがほとんど認められないこと、打点が明瞭であること、打面の形状から押圧剥離とは考えられないことから、間接打撃による打割であると判断できる。

1～2 から推測される「角柱状素材」の法量は、長さ



第1表 妻木晩田遺跡出土石製管玉製作関連資料一覧表

No	調査 区分	地区	出土 位置	遺物 番号	器種	法量				分割法	石 材	図番号	備 考
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
1	1	松尾頭	SI31	J1	管玉	2.42	0.79	0.74	2.3	-	碧玉(石材C)	第1図-4	未成品、VI-2期
2	1	松尾頭	SI31	J2	管玉	2.02	0.64	0.60	1.4	-	碧玉(石材C)	第1図-5	未成品、VI-2期
3	1	松尾頭	SI31	J3	石核	3.63	4.51	3.00	25.2	間接	碧玉(石材C)	第1図-17	接合資料、VI-2期
4	1	松尾頭	SI31	J4	剥片	1.04	2.39	0.61	1.2	間接	碧玉(石材C)	第1図-16	VI-2期
5	1	松尾頭	SI31	J5	剥片	0.93	1.65	0.88	1.2	-	碧玉(石材C)		VI-2期
6	1	松尾頭	SI31	J6	剥片	0.83	1.84	0.94	1.2	間接	碧玉(石材C)		VI-2期
7	1	松尾頭	SI31	J7	剥片	1.51	0.82	0.52	0.6	-	碧玉(石材C)		VI-2期
8	1	松尾頭	SI31	J8	剥片	1.51	1.05	0.59	0.5	-	碧玉(石材C)		VI-2期
9	1	松尾頭	SI31	J9	剥片	1.57	1.19	0.70	1.3	間接	碧玉(石材C)		VI-2期
10	1	松尾頭	SI31	J10	剥片	1.27	2.15	0.80	1.8	間接	碧玉(石材C)	第1図-14	VI-2期
11	1	松尾頭	SI31	J11	剥片	0.85	1.75	0.73	1.0	間接	碧玉(石材C)		VI-2期
12	1	松尾頭	SI31	J12	剥片	0.72	1.77	0.50	0.8	間接	碧玉(石材C)		VI-2期
13	1	松尾頭	SI31	J13	剥片	1.03	2.26	0.66	1.7	間接	碧玉(石材C)	第1図-12	VI-2期
14	1	松尾頭	SI31	J14	剥片	1.22	1.76	0.46	1.2	間接	碧玉(石材C)		VI-2期
15	1	松尾頭	SI31	J15	剥片	1.02	2.17	0.71	1.7	-	碧玉(石材C)		VI-2期、工具痕あり
16	1	松尾頭	SI31	J16	剥片	1.04	2.42	0.78	1.5	-	碧玉(石材C)		VI-2期
17	1	松尾頭	SI31	J17	剥片	2.88	1.43	1.43	8.5	-	碧玉(石材C)	第1図-18	VI-2期
18	1	松尾頭	SI31	J18	剥片	1.29	2.87	0.74	2.7	間接	碧玉(石材C)	第1図-13	VI-2期、工具痕あり
19	1	松尾頭	SI31	J19	剥片	1.25	2.84*	1.10	4.4	間接	碧玉(石材C)	第1図-15	VI-2期
20	1	松尾頭	2N区 遺構外	J1	管玉	0.8	0.65	0.2	0.4	-	蛋白石		
21	15	松尾頭	T1 SK160	296	剥片	1.72	2.75*	0.83	1.7	-	緑色凝灰岩(石材B)	第1図-11	
22	15	松尾頭	T1 SS32	295	剥片	1.17	2.15	0.88	1.4	間接	緑色凝灰岩(石材B)	第1図-9	
23	15	松尾頭	T1 ③層	293	剥片	2.77	3.12*	0.83	5.6	直接	緑色凝灰岩(石材B)	第1図-8	
24	15	松尾頭	T3 ④層	294	剥片	2.00	1.49	0.47	0.7	直接	緑色凝灰岩(石材B)	第1図-10	
25	16	松尾頭	SD47	5-2	管玉	0.74*	0.42	0.39	0.1	-	緑色凝灰岩(石材B)	第1図-1	欠損
26	16	松尾頭	SI97	5-3	管玉	0.84*	0.32	0.32	0.1	-	緑色凝灰岩(石材B)	第1図-2	欠損、V-2~3期
27	16	松尾頭	4区 遺構外	5-1	直方体 素材	3.17	1.90	1.43	13.8	施溝分割	碧玉(石材A)	第1図-7	
28	1	妻木山	SI18	J1	管玉	1.0	0.5	0.5	0.2	-	碧玉(石材C)	第1図-3	VI-2期
29	1	妻木山	SI47	J1	管玉	1.5	1.15	1	0.3	-	碧玉(石材C)		未成品、VI-2期
30	1	妻木山	SI121	J1	剥片	4.45	1.8	6.5	4.7	-	碧玉(石材C)		VI-2期
31	1	妻木新山	SI51	J1	管玉	2.1	0.5	0.4	0.5	-	緑色凝灰岩(石材B)		未成品
32	4	洞ノ原	住居1	90-1	直方体 素材	3.5	1.5	1.6	10.7	施溝分割	碧玉(石材A)	第1図-6	

注(1) 遺物番号は、取報告の番号と対応する。

(2) 法量について、残存値については\*を付した。

1~1.5cm、幅0.8~1cm、厚さ0.8~1cm程度であると想定され、8~11は角柱状素材になり得ない。これらが本当に管玉製作に関連するかについて検証する必要があると思われるが、現状では石材Bに施溝分割技法に関する資料は確認されておらず、上記のように2種の打割による剥片のみが見られる。

### (3) 石材Cにみられる素材獲得技術

石材Cは、花仙山産の碧玉に類似した、濃緑色で硬質の石材である(第1図3~5・12~18)。妻木晩田遺跡からは20点余が出土しているが、その年代はいずれも弥生時代終末期に限られる。

3は、妻木山地区出土の管玉の完形品である。

4・5・12~18は、松尾頭第31堅穴住居跡で出土した石材Cの一括資料である。4、5は、管玉の「角柱状素材」である。12~16は、バルブが全く発達せず、打点が明瞭である(写真1)。打面の形状から押圧剥離であるとは考えられず、間接打撃によって剥離されたと考えられる。特に、13は打点に工具痕が観察され、先鋭な工具により打割されたことがわかる(写真2)。間接打撃を用いているが、いずれの剥片も主要剥離面と背

面の剥離方向がバラバラであり、打面を固定して連続的に剥離するような、規格性のある剥片剥離技法ではなかったと考えられる。17は接合資料であるが、打面転移を繰り返しながら剥片剥離がおこなわれたことが窺え、そのことを裏付けている。

3~5から想定される、「角柱状素材」の法量は、長さ2~2.5cm、幅0.5~1cm、厚さ0.5~1cmで、例えば12~14・16は、管玉の直接的な素材とはなり得ない<sup>(5)</sup>。間接打撃による剥片剥離は、比較的効率が良いとされているが、「角柱状素材」となり得るものは、全体の2割未満である<sup>(6)</sup>。松尾頭第31堅穴住居跡の一括資料を見る限り、素材獲得技術の未熟さを感じざるを得ない。

### 3. まとめ

妻木晩田遺跡では、断片的とはいえ玉作関連資料が認められる。その中で、高田健一は、洞ノ原地区西側丘陵で出土した玉作関連遺物の報告において、妻木晩田遺跡出土の玉作関連遺物について考察をおこなっている(高田2003)。高田は、軟質の緑色凝灰岩(本稿の石材A)



に「擦り切り分割技法」が用いられる一方、硬質の碧玉（本稿の石材C）には「擦り切り分割技法」が確認できないとし、石材と技法の間に関連があることを示唆している。

今回検証したとおり、妻木晩田遺跡出土の管玉関連資料において、石材と素材獲得技術の間に密接な関わりがあったことは明らかである。さらに、石材Aで見られた素材獲得技術は大賀（大賀2001）の設定したB技法に、石材B・Cの素材獲得技術は同じくC技法に比定されると考えられるが、細かく見ると石材Bと石材Cの素材獲得技術にも違いがあり、C技法はさらに細分できる可能性があることも判明した。

妻木晩田遺跡には、弥生時代中期からの技術を残した石材A、直接打撃と間接打撃によって打割した石材B、さらに間接打撃によって打割した石材Cの三者が認められる。現在のところ、石材Aの資料は「直方体素材」が単発的に見られるのみである。一方、石材B、石材Cは、妻木晩田遺跡の集落内で管玉製作をおこなった痕跡を確認できるが、それでは石材B、Cはどのような関係になるのだろうか。

石材Bの管玉が出土した第16次発掘調査松尾頭第97竪穴住居跡は、弥生時代後期中葉～後葉に位置づけられ、石材Cの一括資料が出土した松尾頭第31竪穴住居跡より先行する。また、素材獲得技術の点からみると、石材Bの素材剥片が主にソフトハンマーによる直接打撃によって剥離される一方で、石材Cの素材剥片は、主に間接打撃によって剥離されている。これらから、石材B（直接打撃・間接打撃）→石材C（間接打撃）という流れが想定できるのではないだろうか。

今回は、時間的制約から打割に利用された工具や他の遺跡との関係までを考察することができなかった。今後、他遺跡の資料と比較しながら、妻木晩田遺跡の石製管玉の素材獲得技術を周辺地域との関係においてどのように位置づけることができるのか見ていきたいと思う。

本稿をなすにあたり、既報告資料についても再実測した資料がある。また、米田克彦氏からは様々なご教示をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

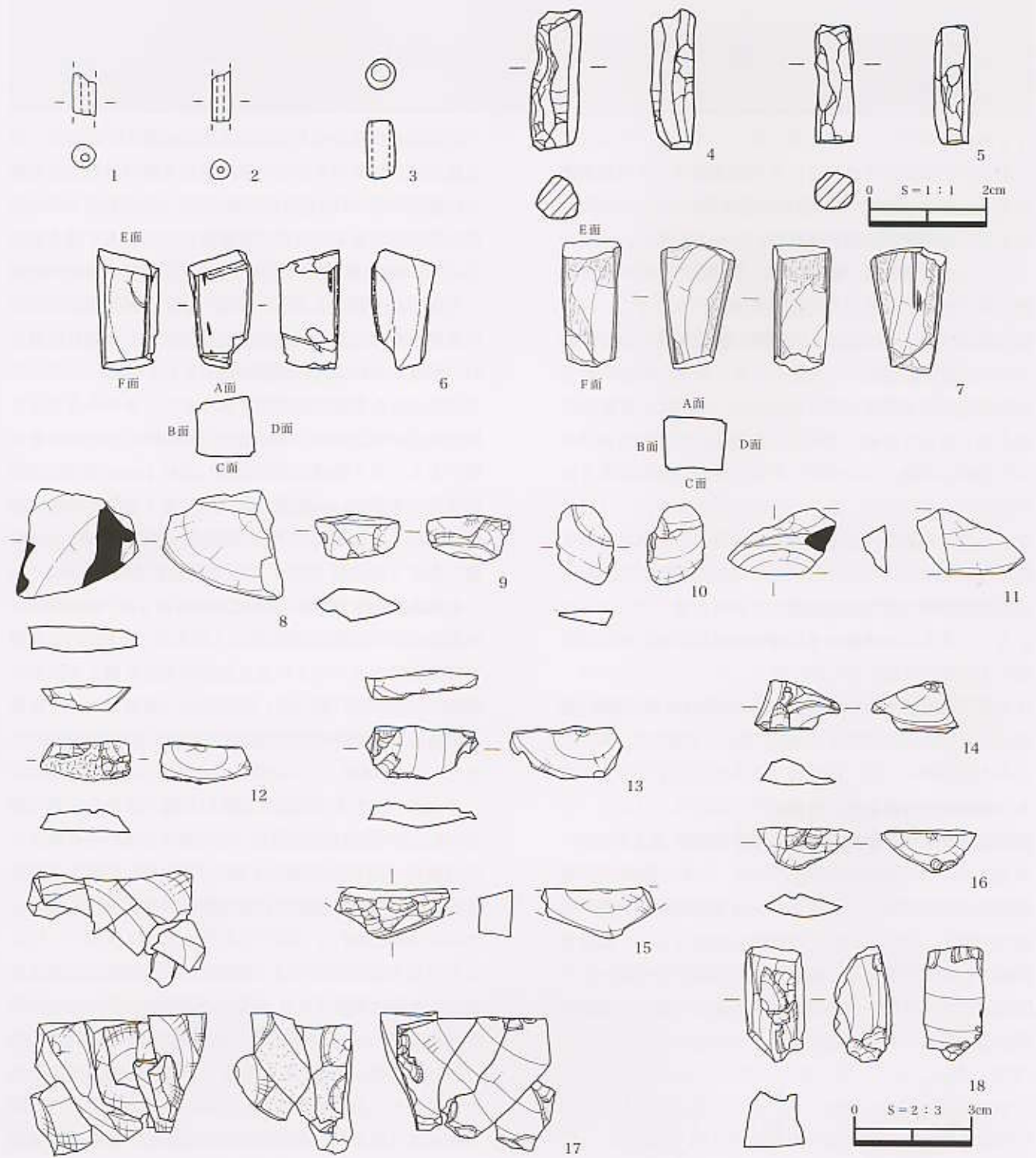
（河合 章行）

#### 【註】

- (1) 大沼克彦は実験をとおして「ハンマーを同定する有効な基準」を示している（大沼2002）。このように、本来実験等により実証的に検討すべきだが、本稿では経験に基づき判断した。
- (2) 米田克彦氏のご教示による。
- (3) ここでいう「直方体素材」は湯村功の「直方体素材③」に該当する（湯村2002）。本来は玉作全般をとおした用語を用いるべきだが、全体を検討することができなかつたため、ここでは本稿に限った用語として使用する。
- (4) 管玉の素材となる棒状品を指す。(3)と同じく、本稿に限った用語として使用する。
- (5) 米田氏のご教示による。
- (6) 「角柱状素材」となり得るものは、製品化されて遺構外に搬出された可能性があるため、一概に2割未満とするのは危険であるが、「失敗品」が多数存在することには変わりはない。

#### 【主要参考文献】

- 大賀克彦 2001 「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』86-4、日本考古学会
- 大沼克彦 2002 「文化としての石器づくり」学生社
- 高田健一 2003 「玉作関連遺物」『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書—洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査—』濱田竜彦編、鳥取県教育委員会
- 寺村光晴 1966 「古代玉作の研究」吉川弘文館
- 丹羽野裕 2004 「松江市西川津遺跡における弥生時代管玉製作技術の再検討—施溝による板状素材の作出技術を中心に—」『古代出雲における玉作の研究Ⅰ—中国地方の玉作関連遺跡集成—』深田浩編、鳥取県教育委員会
- 深田浩編 2004 「古代出雲における玉作の研究Ⅰ—中国地方の玉作関連遺跡集成—」鳥取県教育委員会
- 深田浩編 2005 「古代出雲における玉作の研究Ⅱ—中国地方の玉製品出土遺跡集成—」鳥取県教育委員会
- 湯村功 2002 「第3章 出土遺物 第3節 石器 管玉製作関係」『青谷上寺地遺跡4』湯村功編、鳥取県教育文化財団
- 米田克彦 2000 「碧玉製管玉の分類と碧玉原産地」『古代古備』22、古代古備研究会



第1図 妻木晩田遺跡出土石製管玉関連資料



写真1  
MGS131J13 (12)  
の打点



写真2  
MGS131J18 (13)  
の打点(工具痕)